

クニツクで美しく奏された。恩師カザルスとの出会いのときと同年齢になったという平井。カザルス同様、長く現役を保ってほしい。(8月28日・東京文化会館〈小〉〈萩谷由喜子〉)

平井丈一朗 VC

前半は次男元喜のピアノで、ヴィヴァルディ「ソナタ」へ長調とベートーヴェン「ソナタ」イ長調。ことに、威風堂々の第1楽章、上質の諧謔味を表出した第2楽章、快調に疾走したフィナーレと、各楽章の性格を明瞭に照らした後者にはヴェテラの風格が漂った。後半は長男秀明の指揮する祝典オーケストラとの共演。ハイドン「第1番」ハ長調は20世紀に発見されて話題となった協奏曲で、日本での初演者は平井自身。明朗さの中に豊かな人間味を滲ませた楽想が朗々と歌い上げられ、すべての楽章に自身による聴き応えある力デンツァが挿入された。弦楽合奏を従えた平井丈一朗《祝典序曲》は皇太子ご成婚記念作品。最後に再び管楽器が入り、そこに元喜のピアノも加わって平井の《ローレライ》による幻想曲《不協和音を用いた卓抜な序奏からカデンツァに入り、ピアノに導かれていよいよテーマが現れるという構成も見事なら、ハイポジションの多用された幻想曲も健在なテ